# 板付周辺遺跡調査報告書
# (12)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第154集

1 9 8 7
福 岡 市 教 育 委 員 会

# 板付周辺遺跡調査報告書
# (12)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第154集

1 9 8 7
福 岡 市 教 育 委 員 会

# 正誤表

板付周辺遺跡調査報告書(12) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第154集

| 頁・行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|
| 挿図目次 | | (縮尺) 1:5000 |
| 〃 | 図18…遺跡変遷図 | 図18…遺跡水田変遷図 |
| 〃 | 図19 (縮尺) 1:200 | 1:400 |
| 〃 | 図28…遺跡出土遺物 | 図22…遺跡SE4出土遺物 |
| 7頁 | 図13 板付F8e地点遺跡全景 | 図6 諸岡B第18次地点遺跡 SK47・50東から) |
| 9頁 | 図9 諸岡第18次地点遺跡 | 図9 諸岡B第18次地点遺跡 |
| 12頁 | 図12 …… (東から) | 図12 …… (南から) |
| 12頁29行 | 諸岡2次 | 諸岡B2次 |
| 16頁 | 図19 | 図18 |
| 19頁表6 | 1987年月26日 | 1987年1月26日 |
| 19頁4行 | E.D9地点 | D・E9地点 |
| 21頁3行 | 磁石 | 礎石 |
| 23頁5行 | F5f地点 | F5b地点 |
| 26頁(図) | | 図30 高畑第12次調査地点 遺跡調査区全体図 (1:400) |

# 序　文

板付遺跡については、日本における農耕文化出現を語る上で、その重要性は周知の通りであります。板付遺跡を含む板付周辺遺跡についてもそこに見られる空間的なつながりだけでなく、個々の地点における内容も重要なものを持っています。その様な意味から福岡市教育委員会では国庫補助を受け当地内に於ける土木工事等に先立ち、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査を実施してきました。本書はその昭和60年度及び昭和61年度に実施した調査概要の報告を目的とするものです。本書が文化財の理解のために市民の方々や関係各方面で活用して頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書発行までの間に様々ご助言、ご協力を頂いた方々に心から感謝申し上げます。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

# 例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が国庫補助により昭和60・61年度実施した板付遺跡及び周辺遺跡の発掘調査報告書である。

2．昭和60・61年度調査組織

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　佐藤 善郎

調査総括　埋蔵文化財課長　柳田 純孝

埋蔵文化財第2係長　飛高 憲雄

調査庶務　埋蔵文化財第1係　松延 好文

調査担当　（昭和60年度）　埋蔵文化財第2係　山口 譲治・杉山 富雄

（昭和61年度）　埋蔵文化財第2係　山口 譲治・吉留 秀敏

調査補助　野村 俊之・李 弘鐘

3．本報告書に係る遺物及び記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵保管されるので活用されたい。

4．本書の執筆は、文末に記す各担当者がおこなった。編集は、担当者の協力を受け杉山がおこなった。

5．本書で使用する方位は磁北で、真北から西偏6度21分である。

# 本 文 目 次


Ⅰ　板付周辺遺跡　――昭和60・61年度の調査――　…… 1
Ⅱ　諸岡B第18次地点遺跡の調査　…… 3
Ⅲ　板付F8e地点遺跡の調査　…… 11
Ⅳ　板付E8a地点遺跡の調査　…… 17
Ⅴ　板付F5f地点遺跡の調査　…… 20
Ⅵ　高畑第12次地点遺跡の調査　…… 24
Ⅶ　まとめ　…… 26


# 挿 図 目 次


図1　板付周辺遺跡調査地点位置図
図2　諸岡B第18次地点遺跡全景（南から）　…… 3
図3　諸岡B第18次地点遺跡調査区全体図（1：200）　…… 4
図4　諸岡館址・周辺調査区（1：600）　…… 5
図5　諸岡B第18次地点遺跡地下式壙実測図（1：80）　…… 6
図6　諸岡B第18次調査地点遺跡SK47・50（東から）　…… 7
図7　諸岡B第18次調査地点遺跡出土遺物実測図（1：4）　…… 8
図8　諸岡B第18次調査地点遺跡SK59土層縦断面図（1：40）　…… 9
図9　諸岡B第18次調査地点遺跡SD48（東から）　…… 9
図10　諸岡B第18次地点遺跡地下式壙　…… 10
図11　諸岡B第18次地点遺跡SD48土層断面図（1：50）　…… 11
図12　諸岡B第18次地点遺跡SX100（南から）　…… 11
図13　板付F8e地点遺跡全景（北から）　…… 13
図14　板付F8区及び周辺の調査地点位置図（1：1000）　…… 14
図15　板付F8e地点遺跡出土遺物（1：4）　…… 15
図16　板付F8e地点遺跡土層断面図（1：40）　…… 15
図17　板付F8e地点遺跡調査区全体図（1：400）　…… 16
図18　板付F8e地点遺跡変遷図（1：200）　…… 16
図19　板付F8f地点遺跡調査区全体図（1：200）　…… 18

図20　板付F8f地点遺跡土層断面図（1：40）…… 18
図21　板付F8f地点遺跡出土遺物実測図（1：4）…… 18
図22　板付E8a地点遺跡周辺実測図（1：400）…… 19
図23　板付E8a地点遺跡調査区全体図（1：200）…… 20
図24　板付E8a地点遺跡遺構断面模式図 …… 20
図25　板付F5区及び周辺の調査地点位置図（1：1000）…… 22
図26　板付F5f地点遺跡調査区全体図（1：200）…… 23
図27　板付F5f地点遺跡土層断面図（調査区南壁）（1：40）…… 23
図28　板付F5f地点遺跡出土遺物（1：4）…… 24
図29　板付F5f地点遺跡SE4（西から）…… 25
図30　高畑第12次調査地点遺跡調査区全体図（1：400）…… 26

# 表　目　次

表1　板付周辺遺跡一覧 …… 1
表2　昭和60・61年度板付周辺遺跡発掘調査一覧 …… 1
表3　諸岡B第18次地点遺跡調査要目 …… 3
表4　板付F8e地点遺跡調査要目 …… 11
表5　板付F8f地点遺跡調査要目 …… 15
表6　板付E8a地点遺跡調査要目 …… 17
表7　板付F5f地点遺跡調査要目 …… 20
表8　高畑第12次地点遺跡調査要目 …… 24

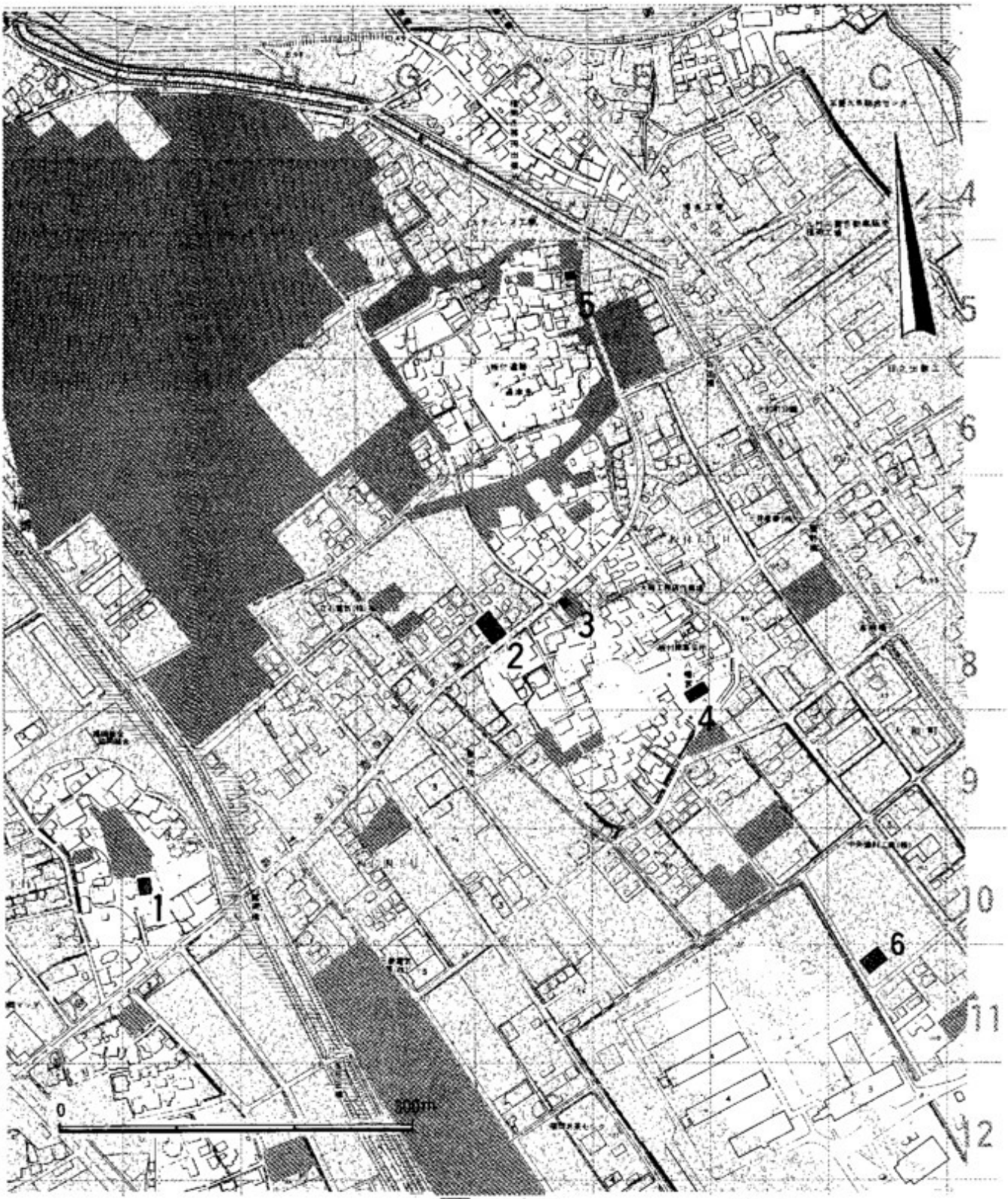



図1　板付周辺遺跡調査地点位置図（1：5000）

# I　板付周辺遺跡　—昭和60・61年度の調査—

## 史跡板付遺跡とその周辺遺跡の緊急調査

板付遺跡及び板付水田遺跡は、昭和49年に、その一部が国史跡として指定された（それぞれ、1.8ha、0.9ha）。福岡市教育委員会は、両遺跡の範囲確認のためと隣接遺跡としての重要性とから、表1に掲げる埋蔵文化財包蔵地を板付周辺遺跡として民間の宅地開発事業等の土木工事に先立ち、緊急調査を実施してきた。

| 埋蔵文化財名称 | 所在地 | 分布地図記号 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 板付遺跡 | 博多区板付２丁目地内 | 24（板付）A-8 | 一部国指定史跡 |
| 板付八幡古墳 | 博多区板付２丁目地内 | 24（板付）B-2 | |
| 板付水田遺跡 | 博多区板付4丁目・5丁目地内 | 24（板付）C-1 | 一部国指定史跡 |
| 高畑遺跡 | 博多区板付６丁目地内 | 24（板付）A-9 | 高畑廃寺を含む |
| 御田生産遺跡 | 博多区板付６丁目地内 | 24（板付）C-2 | |
| 諸岡B遺跡 | 博多区諸岡1丁目・2丁目・4丁目地内 | 24（板付）A 9 | 諸岡館址を含む |
| 諸岡古墳群 | 博多区諸岡2丁目・4丁目地内 | 24（板付）B-1 | |

表１　板付遺跡・周辺遺跡一覧

## 昭和60・61年度の調査

（表２）　昭和60年度の発掘調査は、諸岡Ｂ遺跡の１地点（諸岡Ｂ第18次地点）について実施した。昭和61年度の発掘調査は、板付遺跡・板付八幡古墳（板付F5f地点・E7a地点）、板付水田遺跡（板付F8e地点）、高畑遺跡（高畑第12次地点）の計４地点について実施した[注1]。

なお、以上の発掘調査の外に、公共事業にかかる発掘調査（昭和60・61年度）及び、埋蔵文化財の事前審査にかかる試掘調査も行なわれている。

| 調査地点 / 遺跡　地点 | 所在地 | 原因工事 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 昭和60年度調査 | | | |
| 諸岡Ｂ遺跡　18次地点（板付１10区） | 博多区諸岡１丁目17－33外 | 個人専用住宅の建築 | |
| 板付遺跡　G6b地点 | 博多区板付２丁目地内 | 下水道築造 | |
| 　　F5e地点 | 博多区板付２丁目地内 | | |
| 昭和61年度調査 | | | |
| 板付遺跡　F8e地点 | 博多区板付５丁目 | 個人専用住宅の建築 | |
| 板付遺跡　F5f地点 | 博多区板付２丁目 | 個人専用住宅の建築 | |
| 板付遺跡　E8a地点 | 博多区板付５丁目 | 個人専用住宅の建築 | |
| 高畑遺跡　12次地点（御田生産遺跡、板付Ｃ11区） | 博多区板付６丁目 | 住宅地造成 | |
| 板付遺跡　F8f地点 | 博多区板付５丁目地内 | 個人専用住宅の建築 | 試掘調査 |
| 板付遺跡　F5g地点 | 博多区板付２丁目地内 | 下水道築造 | |
| 板付遺跡　G4a地点 | 博多区板付２丁目地内 | 下水道築造 | |
| 板付遺跡　H5b地点 | 博多区板付２丁目地内 | 下水道築造 | |
| 板付遺跡　H5c地点 | 博多区板付２丁目地内 | 下水道築造 | |

表２　昭和60年度・61年度調査一覧（板付遺跡・周辺遺跡）

**諸岡Ｂ第18次地点遺跡**　推定諸岡館址に位置する。第14次調査で一部確認されていた溝の続き及び、地下式壙を検出した。西専寺庫裏建替えに先立って発掘調査を実施した。

**板付F8e地点遺跡**　板付G7b地点遺跡地点の南の板付水田遺跡に位置する。弥生時代前期の水田を始め、水田が重層的に検出された。個人の専用住宅建替えに先立つ発掘調査である。

**板付F5f地点遺跡**　板付遺跡中央台地(注2)東側斜面末端部に位置する。整地層下に弥生時代から古代までの遺構を検出した。個人の専用住宅建替えに先立って発掘調査を実施した。

**板付E8a地点遺跡**　板付遺跡南台地東側斜面上に位置する。神社建替えに際して発掘調査を実施した。古墳時代の住居址のほか、近世初頭からの神社建物を検出した。

**高畑12次地点遺跡**　福岡市文化財分布地図上では高畑遺跡の東北端、餅田生産遺跡にかかる位置にある。南北に位置する調査地点で検出されていた大溝を検出した。分譲住宅建築に先立って調査を実施したものである。

**その他の調査**　公共事業関係としては、下水道建設に先立つ発掘調査が実施されている。

**昭和60年度　板付G6b地点遺跡**　板付遺跡中央台地西縁部に位置する。台地に沿い北流する流路が調査されている。

**板付F5e地点遺跡**　板付遺跡中央台地の北縁部に位置する。御笠川の沖積地に面しており、削平のためか、八女粘土の面まで露出しており、遺構は殆ど遺存していなかった。

**昭和61年度　板付F5g地点遺跡**　板付中央台地の東縁部に位置する。台地に直交する方向のトレンチ状の調査区で、台地縁辺に平行す２条の弥生時代中期の溝、段状に削平された地山とそれを覆う整地層を調査した。

**板付F5h地点遺跡**　板付F5g地点の南に位置している。鎌倉時代の掘立柱建物のほかに古墳時代中期までの遺物を含む包含層が遺存し、銅鏃、ガラス小玉、勾玉等の出土があった。

**板付G4a地点遺跡**　板付遺跡中央台地と北台地間の鞍部に位置する。台地の東の落ち際を検出した。全体に削平が著しく、八女粘土面が現れている。５世紀代の井戸、北半部に夜臼～板付Ⅱ式期の包含層がある。また、北台地と中央台地の間に流路のあることが考えられるようになった。

**板付H5b地点遺跡**　板付遺跡中央台地の西縁部の沖積地に位置し、夜臼期の溝１条が検出された。

**板付H5c地点遺跡**　板付遺跡中央台地西縁部に位置する。従来の予想より西へ延びる台地部で甕棺墓地の調査したほか、沖積地に夜臼～板付Ⅱ式期の包含層、H5b地点につながる夜臼期の溝を調査した。

（杉山）

# Ⅱ　諸岡Ｂ第18次地点遺跡の調査

図２　諸岡Ｂ第18次地点遺跡全景　　（南から）

| | | |
|---|---|---|
| 遺跡調査番号：　8501 | | 遺跡略号：　MRB |
| 調査地籍：　博多区諸岡１丁目17－33外 | | 分布地図番号：　24－Ａ－７ |
| 工事面積：　300㎡ | 調査対象面積：　300㎡ | 調査実施面積：　148㎡ |
| 調査期間：　1985年４月26日～1985年５月20日 | | |

表３　諸岡B第18次地点遺跡調査要目

## １．調査の概要

**諸岡Ｂ遺跡**　諸岡Ｂ遺跡は、博多湾奥に広がる沖積地に囲まれて舌状に残る中位段丘Ⅱ面が、北に向かい、沖積地下に没しようとするその末端部に立地する遺跡である。南半部は比高10ｍを測る小高いたかまりとなっているのに対して、北半部は沖積地との比高４ｍ程の低い台地状を成している。この丘陵には、先土器時代以降、各時代の遺跡が知られている。今回調査地点周辺における調査としては、14次・15次・17次地点におけるそれが

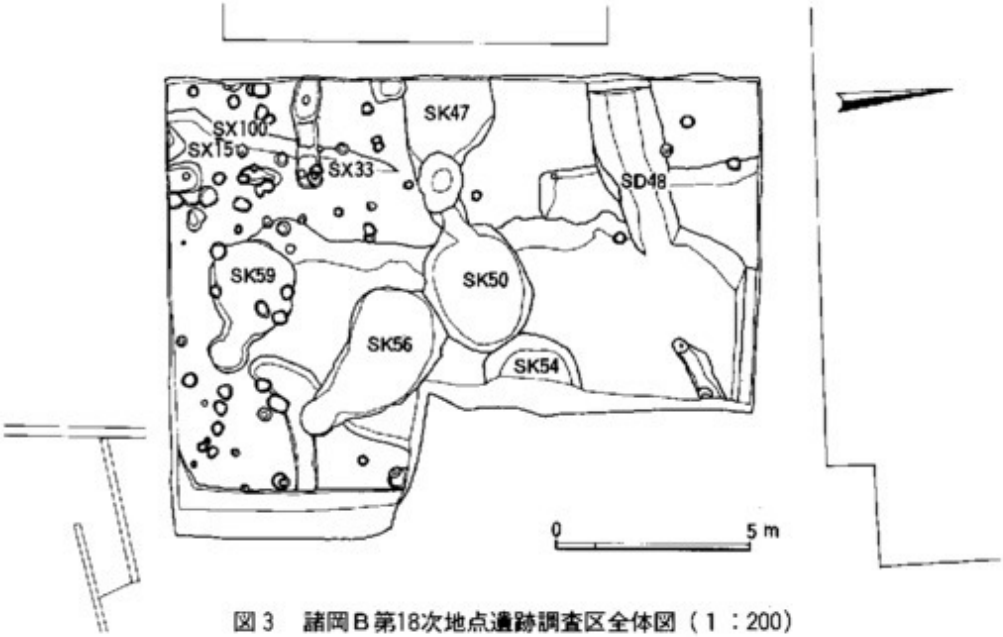



図３　諸岡Ｂ第18次地点遺跡調査区全体図（１：200）

ある（図４）。14・17次地点は、推定諸岡館址範囲内にあり、また、本調査地点に北接している[注14]。

## 諸岡Ｂ遺跡の第18次調査

（図３）　今回調査は、西専寺庫裏建替えに際して実施したものである。調査は、建築工事庫裏部分300㎡を対象として、1985年５月20日に開始、６月11日に埋戻しを終了した。結果として148㎡について調査を実施したこととなる。なお、東側部分については第14次調査時に試掘を実施しており、遺構等の検出は見ていない。

過去の段状の地行が行なわれた結果、かなり削平され、鳥栖ローム層のうちの下位部分が遺構検出面となっており、遺構はすべてこの面で検出された。その深さは西端部では地表下0.2ｍ、東端部では地表下0.91ｍを測る表土はいずれも新しい時期の整地、盛土層である。東半分は検出面は深いがこれは段落ちを近年埋め立てて現地盤までかさあげした結果である。

調査による出土遺構・遺物は、明確な時期を示せるような資料に乏しいが、地下式壙、溝の他に柱穴状の小穴等を検出調査することができた。以下、遺構毎に説明を行なう。

## ２．諸岡Ｂ第18次地点遺跡の遺構と遺物

### 地下式壙[注15]　SK47・50，SK54，SK56，SK59

配列するというより、一箇所に密集した一群を成すというような状態で検出された。基本的にはいずれも入口と考えられる竪坑部、横穴状の通路部そしてそこから入った地下式の壙室からなるものである。５基を調査した。

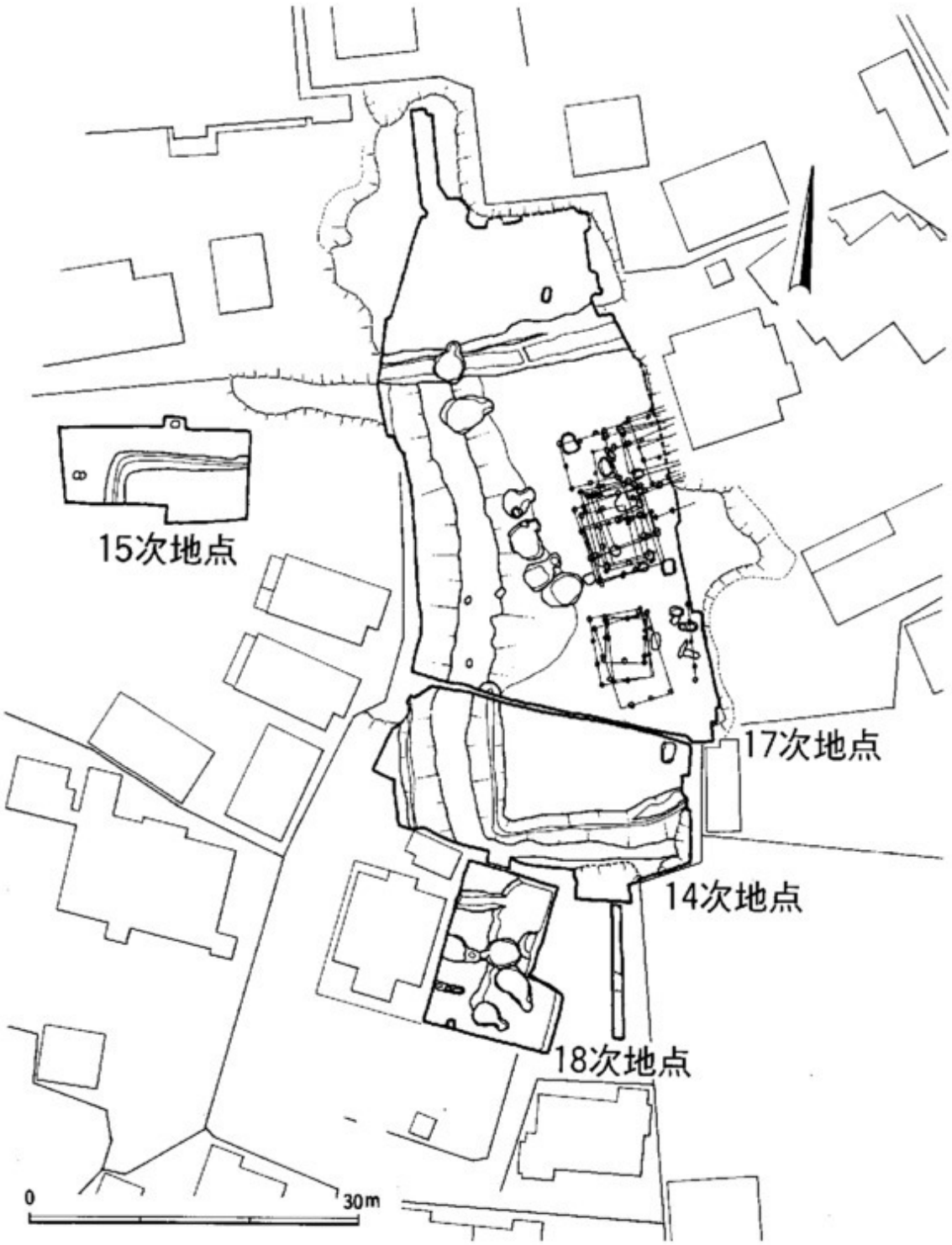



図4　諸岡館址周辺調査地点（1：600）

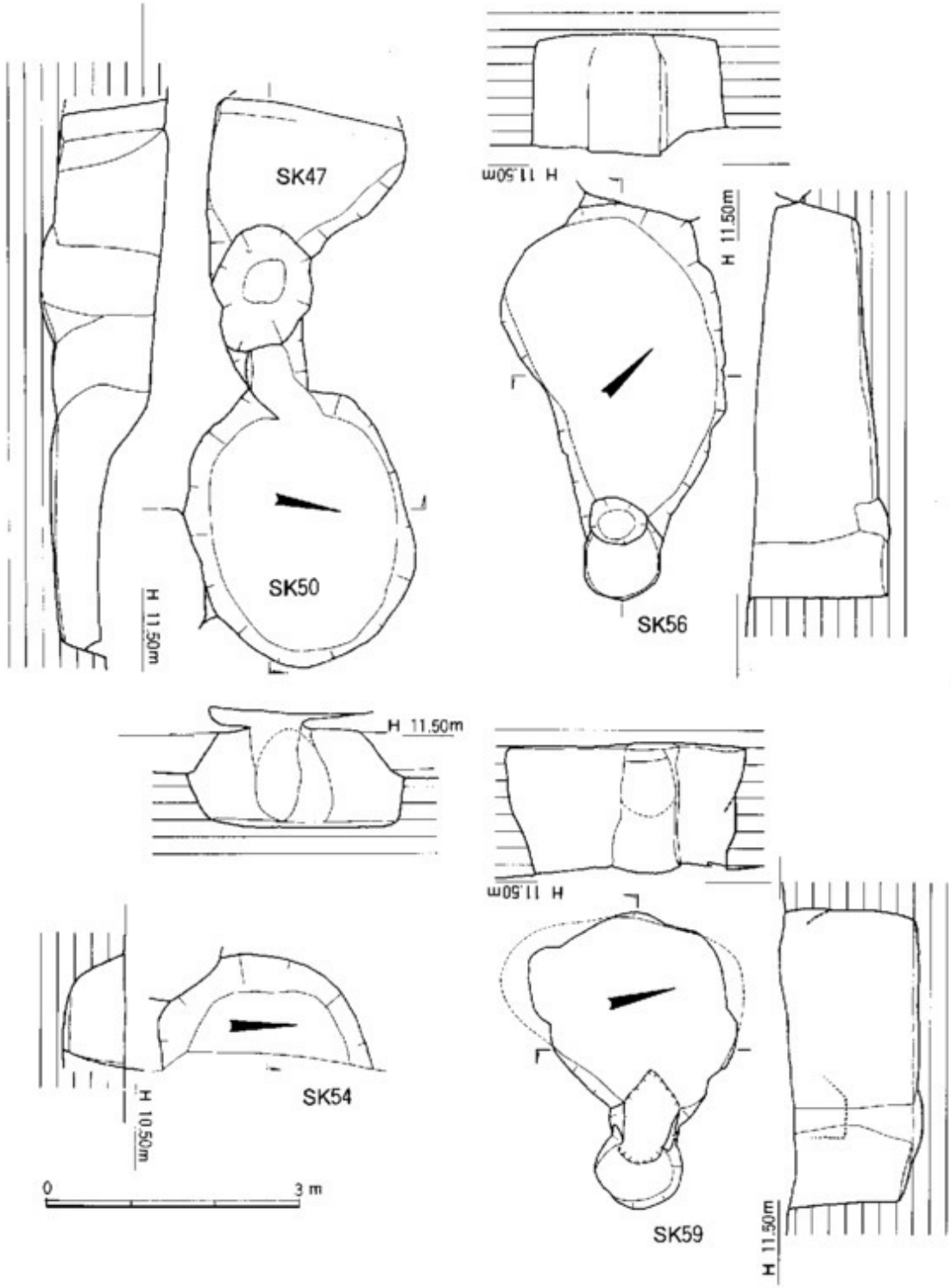



図5　諸岡B第18次地点遺跡地下式壙実測図（1：80）

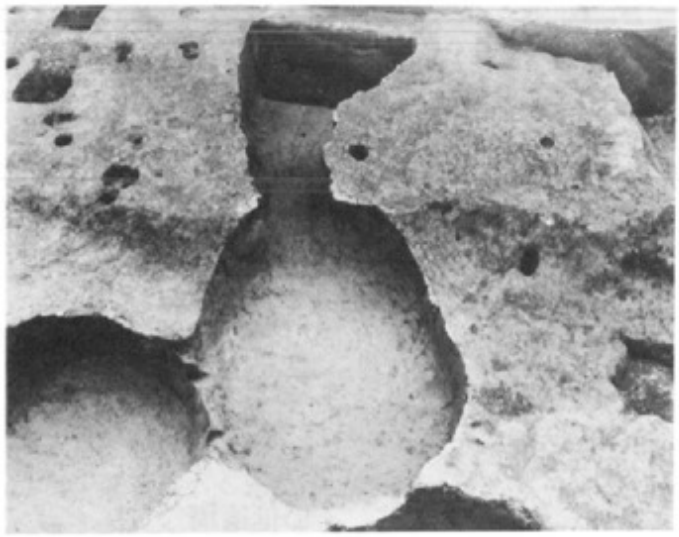


図13　板付 F8e 地点遺跡全景　　（北から）

**SK47・50**　（図５・６・10）　２基がひとつの竪坑を共有することで連接したようなかたちを成している。竪坑から東西に分かれる２室は共に平面楕円形状を呈し、SK47は、一部が調査区外にあり長さ不明、幅は床面で現況2.3ｍを測る。遺物の出土は無かった。SK50は、壙室の長さ2.2ｍ、幅2.3ｍ、深さ1.2ｍを測る。SK50の床面のほうが僅かに低い。又、入り口に相当する竪坑部は両方の床面より0.2ｍほど低い凹みとなっている。調査時、側壁は迫り出し部分までの遺存を確認している。調査中、乾燥崩落した。埋没の状況を考えてみると、SK47の土層に見るようにある程度の土砂の流入があった後、側壁が崩落しているようである。ただ、天井の崩落というには、地山ロームの土量が少ない。後世の削平時点での埋め立てが考えられようか。SK50から竪坑部への通路部分には天井が遺存していた。調査中崩落してしまったが、推定で高さは1.0ｍほどと考えられる。竪坑は、径1.1ｍを復原できる。床面より、皿状に0.2ｍほど窪んでいる。SK47とSK50との関係については、その前後関係について考察する資料はいまのところないが、地下式壙の発見例の多くが、地形の傾斜に沿い低いほうに竪坑部を持つことを考えれば、SK47に本来附属する竪坑を利用して、逆のSK50を設けたとも考えられよう。

**SK54**　（図５・10）　調査区東辺部にかかり、一部のみの調査である。竪坑は、附近のものと考えあわせると、東端に位置するものと思われる。現況で平面形楕円形状を成すものとみえ床面での最大幅は1.9ｍ、深さ0.7ｍを測る。床面は丸みをもって側壁につながり、凹凸はない。天井の陥没により一時に埋まったものか床面に直接ロームをかぶっている。SK50とはほとんど接する位置にある。遺物の出土はない。

**SK56**　（図５・10）　竪坑を南東側にもつ地下式壙である。主室は、平面不整な楕円形状を呈する。床面での長さ3.6ｍ、幅2.2ｍを測る。竪坑までを含めた全長は、4.5ｍ、深さは、主室中央部で1.4ｍを測る。竪坑は、確認面で、径0.9ｍを測る不整な円形である。竪坑から壙室への入り口部の床面は皿形に一段低くなっている。壙室の床全体が、竪坑へ向かって傾斜を持っている。遺物は、主室への崩落土中の外、埋め立てに依るものと思われる竪坑内覆土中からも出土した。SK50と主室で接しているが、両者の先後関係は調査時の観察に依っ

ては確認出来なかった。

**SK56出土遺物**　（図７）**土師器**（11・13）　11は、坏底部破片である。全体の1/3の遺存で、胎土に砂粒を含み焼成良好、淡黄褐色を呈する。底径7.8cmを測る。13は、口縁の一部を欠く。器表は荒れて外底部糸切りの外は調整等不明であるが、胎土に砂粒・赤色粒子を含んで内面黄橙色、外面黄灰白色を呈する。口縁径10.7cm、高さ2.2cm、底部径6.0cmを測る。

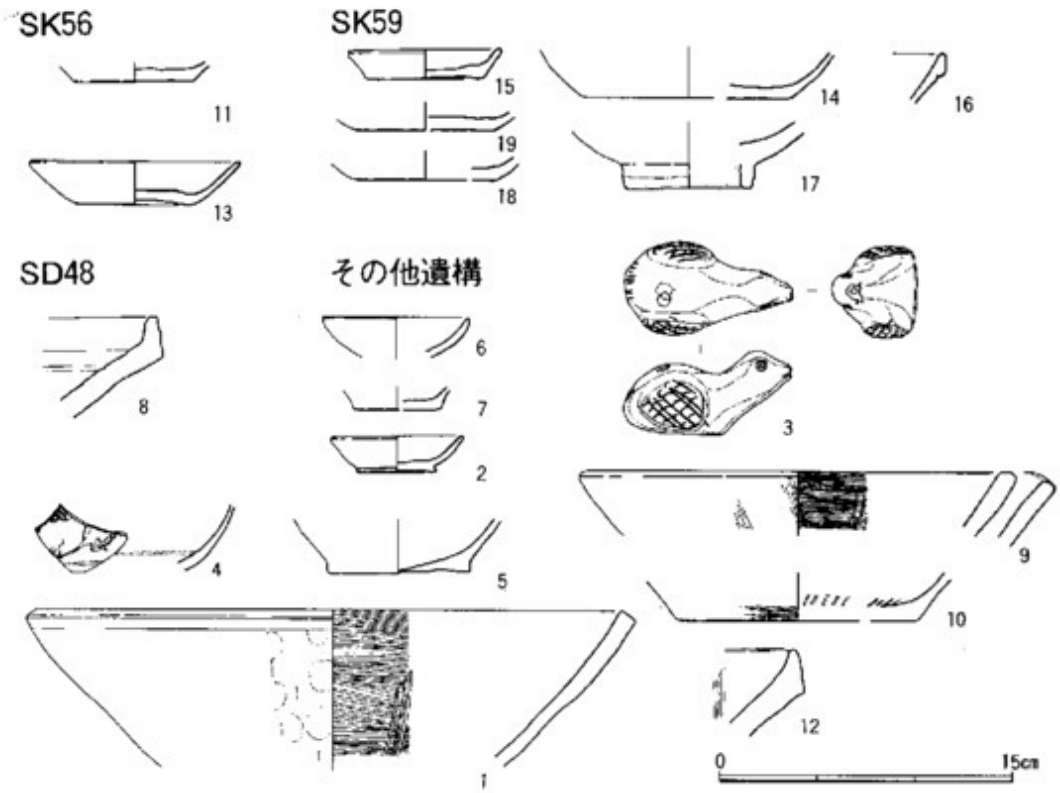
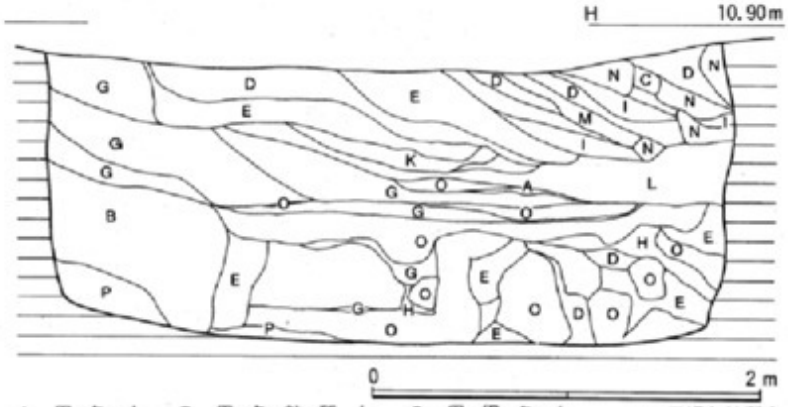



図７　諸岡Ｂ第18次地点遺跡出土遺物（１：４）

**SK59**　（図５・10）　本次調査地点では最も南に位置する。壙室は遺構長軸に対して直交方向に長い楕円形状を呈する。竪坑を東端部に持つ。長さ2.2m、幅2.9mを測る。床面は略水平、側壁は床面からドーム状にたちあがる。現況深さ1.5mを測る。竪坑は径１mの不整な円形状を呈す。壙室への通路部分がそのままずり落ちた様な状態で残っており、それよりするならば床部分を僅かに窪めて高さ0.8m程のドーム状を呈するものであったかと思われる。床面直上に天井部と考えられるローム土が塊状を成して堆積しており、その間を黒色土が埋めている。それより上部はローム土粒、黒色土或いはそれらの混じたもの等が竪坑部から壙室部へレンズ状に堆積しているのが観察された。崩落ローム土の厚さは0.8m程度であり、後世の削平を考えなければ、可成浅い位置に掘り込まれていたことになる。




A 黒色土 B 黒色粘質土 C 黒褐色土 D 黒褐色粘質土
E 黒褐色粘質土（ローム混じり） F 黒褐色乃至暗褐色粘質土 G 暗褐色粘質土
H 暗褐色粘質土（ローム混じり） I 茶褐色土 J 茶褐色土（ローム混じり）
K 茶褐色粘質土 L 茶褐色粘質土（ローム混じり） M 茶褐色粘質土（黄白色ローム混じり） N 暗褐色ローム O 褐色ローム P 黄白色ローム

図8 諸岡B第18次地点遺跡 SK59 土層縦断面図（1：40）

**SK59出土遺物** （図7）

**土師器**（14・15・17・18・19） 何れも外底面には糸切り痕を残す。15は、全形の判る破片である。内外面とも黄灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。口径7.8cm、高さ1.6cm、底径5.9cmを測る。19・18は底部のみの破片である。19は内外面とも胎土に微砂粒を含み淡灰褐色を呈して焼成は良好である。18は、胎土に小砂粒を含み、内外面とも淡赤色を呈して焼成は良好である。19・18ともに底径7.1cmを測る。14は、口縁部を欠く破片である。胎土に粗砂粒を僅かに含み、内外面とも淡橙色を呈して、焼成良好である。底径10.7cmを測る。いずれも壙室崩落土からの出土である。

**陶器碗**（17） 底部の部分的な破片である。胎土は赤褐色で粗い。釉は、高台内面にまで及ぶ。高台径3.2cmを測る。

**白磁碗**（16） 口縁部の小破片である。玉縁をなし、胎土は灰白色精良で、焼成良好である。

## 溝 SD48

（図9・11） 18次地点の調査区は、一部第14次地点調査区と重複しており、その部分で検出されていた溝（SD48）を再確認した。先回調査の所見からするかぎり、SD48は、諸岡館址土塁外周を巡る溝である。本次調査地点の所見からするならば、断面逆台形状を呈し、現況で幅2.0m、深さ1.2mを測る。覆土の状況をみると、下部に

図9 諸岡第18次地点遺跡 SD48 （東から）

SK54（西から）



SK59（東から）



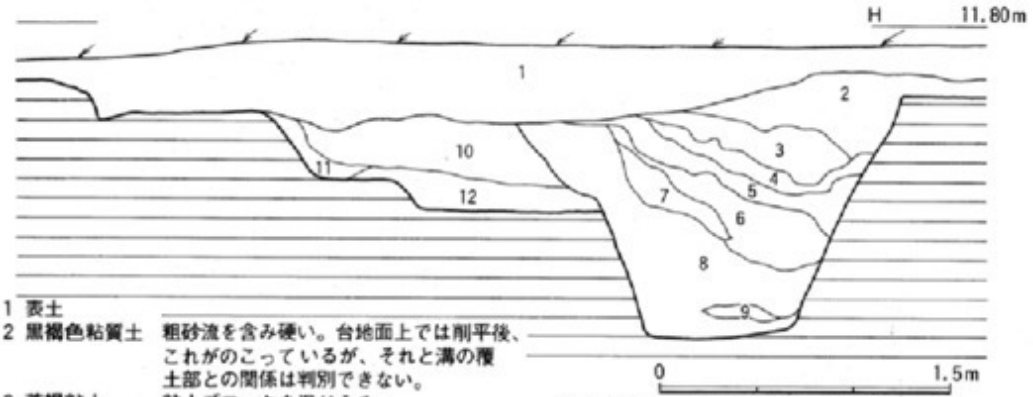
SK47 土層断面（東から）



SK56（東から）



図10　諸岡B第18次地点遺跡地下式壙




1 表土
2 黒褐色粘質土　粗砂流を含み硬い。台地面上では削平後、これがのこっているが、それと溝の覆土部との関係は判別できない。
3 茶褐粘土　粘土ブロックを混じえる。
4 黒色土　旧表土である。軟。
5 暗褐色土　粘土ブロックを混じえる。軟。
6 暗褐色土　黒色土ブロックを混じえる。
7 黄褐色土　地山土をそのまま投入したもの。
8 黄褐色土　団塊状を成す。地山土。
9 黒色土　4と同様。
10 黄褐色土　7と同様。やや明るい。
11 黒褐色土
12 暗黄褐色土　団粒状を成す。

図11　諸岡B第18次地点遺跡　SD48土層断面図（1：50）

ローム粒よりなる黄褐色土にはじまり黒色土等、溝の南側から掘りあげた土でそのまま埋没してゆくかの様な状況が考えられる。また、SD48は南側の人為的に埋戻しのなされた落ち込みを掘り込んで設けられている。

**SD48出土遺物**　（図7）　**陶器擂鉢**（8）　口縁部の小破片である。体部外面が淡赤褐色である外は、灰褐色を呈し、胎土には粗砂粒を多量に含んで焼成堅緻である。備前窯と思われる。

## その他の遺構

**SX100**　（図12）　調査区の南西端にかかり、柱穴かとも考えられるが、一部を調査したのみで判断しかねる。SX15とSX33とからなる。両者は、ほぼ直交して同規模のものとみえる。SX33は間に一段高い台状部を持っており、柱穴であるとすれば、2本の柱を考えられる。平面隅丸の長方形及び其れの連接した形状で断面逆台形状を呈する。底面の高さはほぼ同じである。覆土はローム粒を含む黒色土で、柱痕跡と思われる変化を2箇所で認めた。SX15から染付（図7－2）が出土した以外に、SX33でも

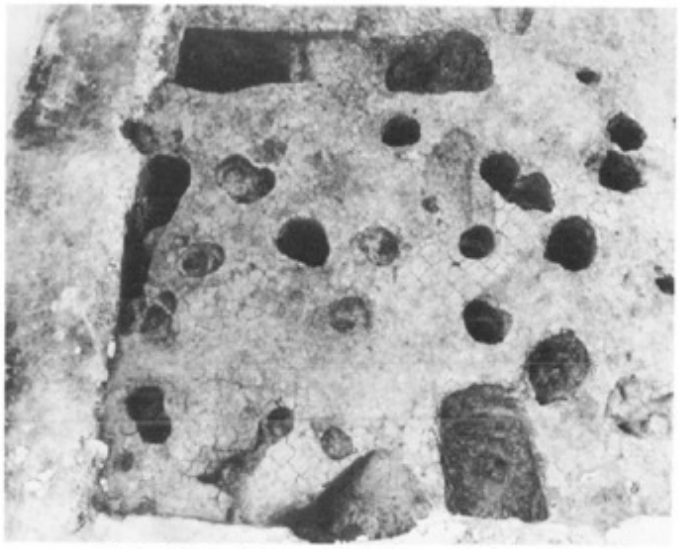


図12　諸岡B第18次地点遺跡 SX100　（東から）

少量の遺物が出土している。

以上の外に柱穴と考えられるような小穴を検出したが、建物の柱の配列として捉えられたものはない。小穴からも遺物の出土があった。

**不明の遺構出土遺物**　（図7）　**土師器**（6・7・2・5）　6は上半部の破片である。器表の荒れが著しい。内面赤褐色、外面茶褐色を呈し、焼成良好である。復原口径7.5cmを測る。7は、底部の破片である。胎土に砂粒を含み、内面黄灰色、外面淡赤色を呈している。復原底径4.6cmを測る。2は全形を復原できる破片である。口縁部内外面に煤が付着している。内外面ともに黄褐色を呈し焼成良好である。二次的な熱を受けている。口径6.9cm、高さ1.9cm、底径4.0cmを測る。5は体部下半の資料である。焼成は良好で、復原底径7.3cmを測る。

**染付**（4）　碗の小破片である。釉は極く細かく発泡している。内面見込附近に2圏線、外面に草花文を描く。

**擂鉢**（1・9・10・12）　土師質土器・陶器には擂鉢がある。1は、口縁から胴部の小破片である。内面は、横方向の刷毛目調整後、条線を施す。外面は、縦方向の箆削後、指撫で或いは、指押えにより調整している。土師質土器で胎土に粗砂粒を含み、内外面とも淡赤色を呈する。焼成は良好である。復原口径31.0cmを測る。9・10も土師質土器である。9は口縁部の、10は底部の小破片である。外面に刷毛目調整痕が残る。10の底部には、黒斑が観察される。9は復原口径22.3cm、10は復原底径12.4cmを測る。

12は陶器である。胎土に粗砂粒を含み、体部外面が赤褐色であるほかは、暗灰色を呈する。内外面とも轆轤回転に依る撫で調整を行なっている。内面にはその後、縦方向の条線が施される。備前窯。

**不明の土製品**（3）　鳥をかたどったものである。中空で体部上面に焼成前の穿孔、下面に焼成後の穿孔がそれぞれみられる。器表は全体に丁寧な箆磨き調整が行なわれ、翼部分は工具により削りだした後、沈線を加えている。目は、竹管状の工具に依っている。瓦質の土器で、胎土には砂粒を僅かに含み、灰白色或いは暗灰色を呈し、焼成は良好である。

**小結**　本次調査により、(1)諸岡館址土塁外側の溝を確認した（SD48）。推定土塁線に平行し、諸岡川方向に消える。溝は、館外方からの土砂によって埋め立てられたかのような埋没の状況を示す。(2)一群の地下式壙が館址土塁を越えて外方に分布することを確認した。分布の様態は、丘陵線近くの東斜面に並列することは館址内に分布する一群と同様であるが、館址内の一群及び諸岡2次地点における一群については、竪坑部の位置が同高度に並列するのに対して、本地点のそれは、一地域内に群在するような点が異なる。

（杉山）

# Ⅲ　板付F8e地点遺跡の調査

| | | |
|---|---|---|
| 遺跡調査番号：　8607 | | 遺跡略号：　ITS |
| 調査地籍：　博多区板付５丁目２－20 | | 分布地図番号：　24－C－1 |
| 工事面積：　429㎡ | 調査対象面積：　429㎡ | 調査実施面積：　227㎡ |
| 調査期間：　1986年５月19日～1986年６月７日 | | |

表４　板付F8e地点遺跡調査要目

## 板付F8e地点遺跡の調査

本調査区は板付南北両台地の鞍部に近い西側の沖積地内に位置する。1978年の調査で夜臼単純期の水田面が確認されたG7a，G7b地区の南側60～70ｍの位置であり、該期の水田面の拡がりが予測される地点である。調査は個人住宅の改築工事に伴い実施した。

層位はおおまかに14層に分離した（図16）。第１層は造成土であり、本地点を宅地化した1936年のものである。第２層はその造成の際に埋没した水田土壌である。第３層は水田床土の累層であるが、時期や面的な拡がりは確認できなかった。第４～５層は洪水砂と推定され、溝SD1の上部でやや泥質化している。第６層は溝SD1の埋土であり粗砂とシルトの互層からなってい

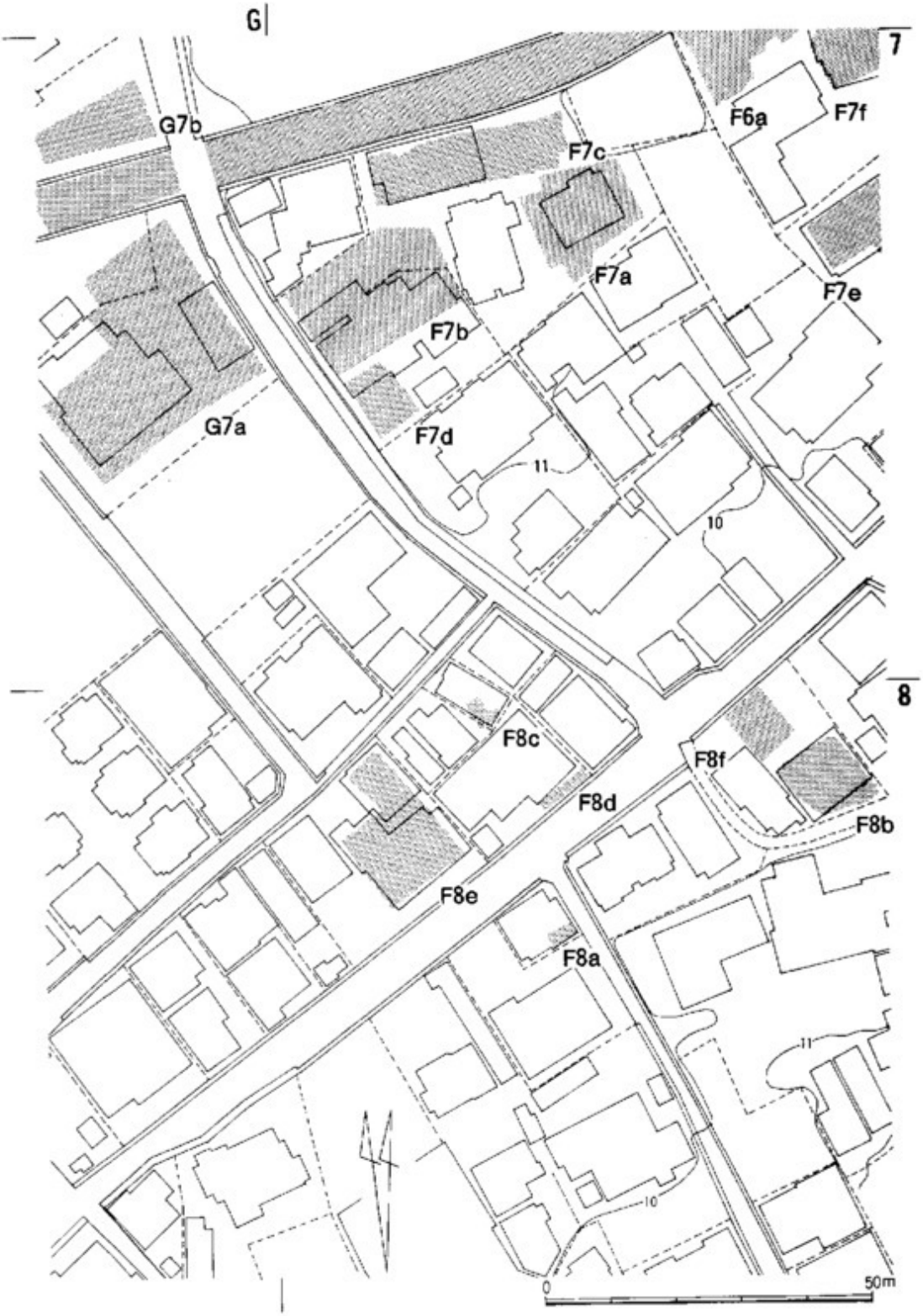



図14　板付F8区及び周辺の調査地点位置図（１：1000）

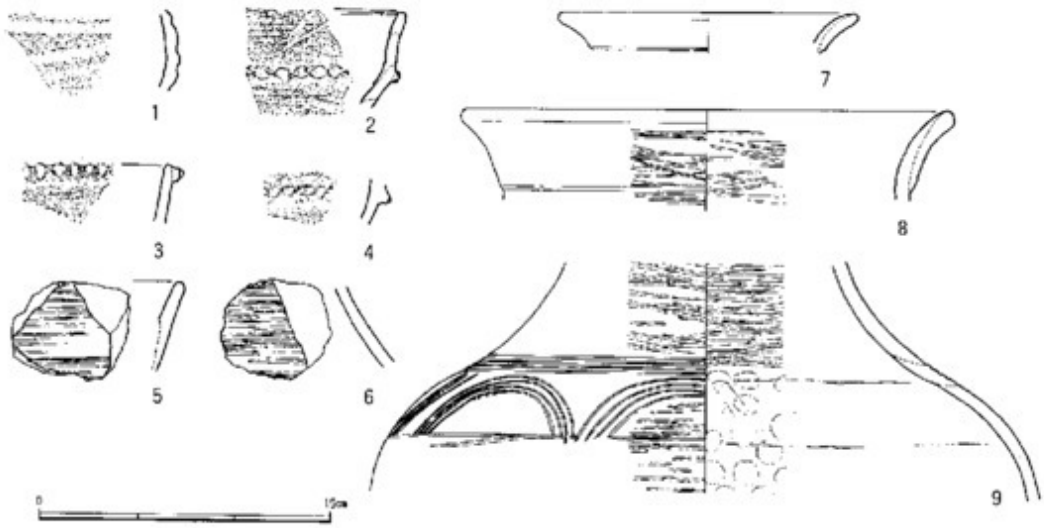



図15　板付F8e地点遺跡出土遺物実測図（１：４）

る。第７．８層は黒灰色の粘質土であり、上面に溝SD1と畦畔と多数の足跡状遺構を検出した。第９層は粗砂とシルトの互層である。第10層は暗青灰色の粘土であり、部分的に途切れて下位層が現れているところもある。本層上面でも溝SD1が存在していて、SD1よりのびる杭列も検出した。第11層は青灰色の砂層であり、調査区内北側にのみ堆積している。第12層は黒色粘土で、調査区内において検出面に30cm前後の段差があり、北側の低位面に多数の足跡状遺構を検出した。第13層は黒灰色粘土、第14層は灰白色粘土であり両者は漸移的変化をする。下位層は八女粘土層であり本遺跡の基盤層を形成する。なお、第４層以下で水田址を面的に確認できたのは、第８層上面と第12層上面の北側である。また保存状況は悪いが第10層上面も杭列の存在などから水田面の可能性が強い。

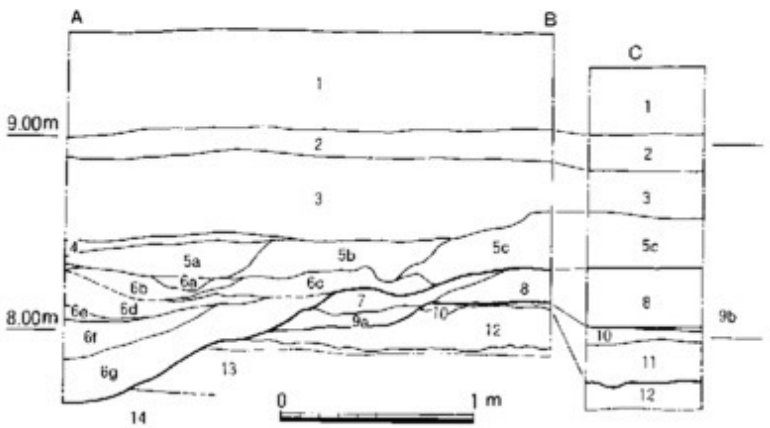


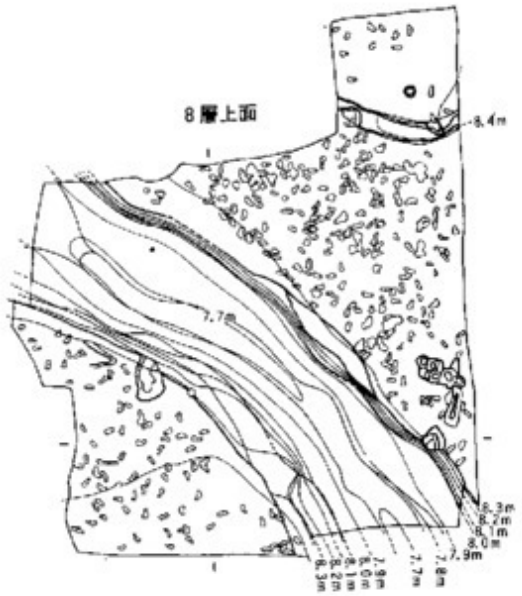

図16　板付F8e地点遺跡土層断面図（１：40）

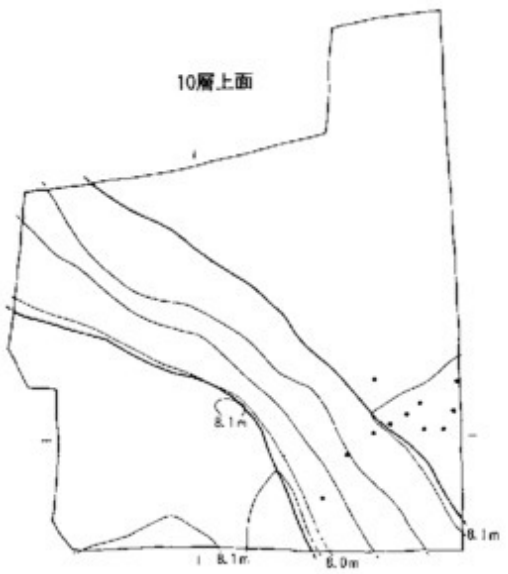
1．造成土　赤褐色ロームブロック
　弥生時代土器片を多く含む（1936年）
2．明灰色土（水田土壌）
3．青灰土と黄褐色の互層（水田床土累層）
4．黒灰色土　　5a．暗灰色砂
5b．暗青～黒灰色微砂　　5c．灰褐色砂
6a．暗灰色粗砂　　6b．黄茶灰色粗砂
6c．黒灰色シルト　　6d．黄茶灰色粗砂
6e．茶灰色粗砂
6f．青灰色砂と黒灰色シルトによる流理層
6g．黒青灰色微砂　　7．黒灰色土
8．黒灰色粘土（水田土壌）
9a．暗青灰色粗砂
9b．黒灰色シルトと灰色砂の互層
10．暗青灰色粘土（水田床面）
11．青灰色細砂～中砂互層
12．黒色粘土（水田土壌を含む）
13．暗黒灰色粘質土
　（下位にしたがい淡色化）
14．灰白色粘土（八女粘土）

## 板付F8e地点遺跡出土遺物

出土遺物は少なく（図15）、第8層上面と第5層の砂層中から板付Ⅰ式土器片（7）、夜臼式土器片（3～6）、鐘ケ崎系土器片（1）、黒曜石製剥片、溝SD1から板付Ⅱa式土器片（8・9）、第12層中から夜臼式土器片（2）が、それぞれわずかに出土したの

図17　板付　F8e地点遺跡　調査区全体図（1：400）



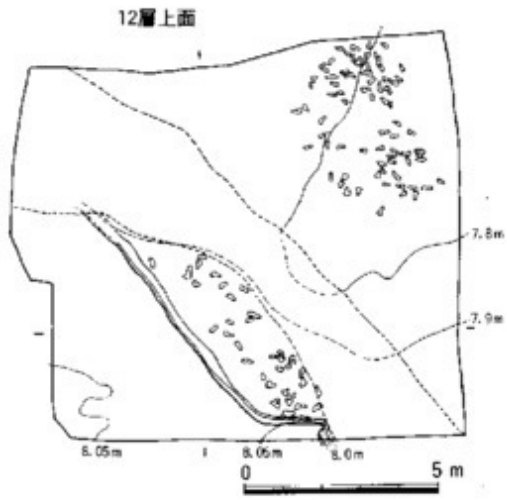




図19　板付 F8e 地点遺跡　水田変遷図（1：200）

みである。したがってこれらから各水田面の時期の比定は困難である。出土遺物の上限とG7a.b地点との比較から第8層上面は板付Ⅱa式期、第10層上面は板付Ⅰ式期、第12層上面は夜臼式期の水田址と推定しておきたい。水田面の高低差は60m離れたG7a地点と各面共に0.3～0.4mを測る。

**板付F8e地点遺跡の遺構**

検出した遺構として注目されるのは調査区中央で検出した溝SD1である。幅3.5～5.0m、深さ0.6mで、流走方向はしだいに真西に近づくがN－70°～80°－Eを測る。層位の観察から夜臼式期には存在せず、板付Ⅰ式期の段階に掘削され、板付Ⅱa式期の段階にも存続している。なおその方向から板付南台地の西側縁辺に沿って掘削されたとは考え難く、南北台地の鞍部を貫流する流路からの支流と考えられる。

最後に、夜臼式期の水田面には段が設けられ、それより南側は水田面とは考え難い地形の凹凸が認められた。この段が板付台地西側に拡がる夜臼式期の水田面の南端を示す可能性は高い。

（吉留）

## 2　板付F8f地点遺跡

| | | |
|---|---|---|
| 遺跡調査番号：　8661 | 遺跡略号：　ITZ | |
| 調査地籍：　博多区板付5丁目7－133 | 分布地図番号：　24－A－1 | |
| 工事面積：　65㎡ | 調査対象面積：　65㎡ | 調査実施面積：　5㎡ |
| 調査期間：　1986年8月6日 | | |

表5　板付F8f地点遺跡調査要目

**板付F8f地点遺跡**

板付F8f地点遺跡は、板付中央台地と同南台地とが形成する鞍部の、最も低い位置に立地する。埋蔵文化財事前調査願を受けて試掘を実施した。結果として、湧水等の条件により本調査には至らなかったが、この鞍部の状況を知るうえで重要であると考えられるので、本書に概要を報告する。

**周辺の状況**

本地点の南に接して板付F8b地点がある。昭和52年度に発掘調査を行なった。地山は八女粘土・烏栖ロームで、その上に砂層・粘土層が堆積していた。地山面を確認面として、弥生時代中期後葉の遺構が検出された。溝、井戸状遺構、竪穴がある。また、これを覆う堆積層中からは弥生式土器が大量に出土した。中期後葉の土器が最も新しく、かつ大部分を占める。[117]

**板付F8f地点遺跡の試掘調査**

南北方向にトレンチを設定し、機力により掘削を行なった。旧水田への盛土・旧水田耕土下は粘土層となる。粘土層は、粗砂層を挟むほか、色調により細分できる。地表下0.9m（標高8.4m前後）でシルト層となる。この深さで湧水が始まる。以下は砂層、粗砂層となる。

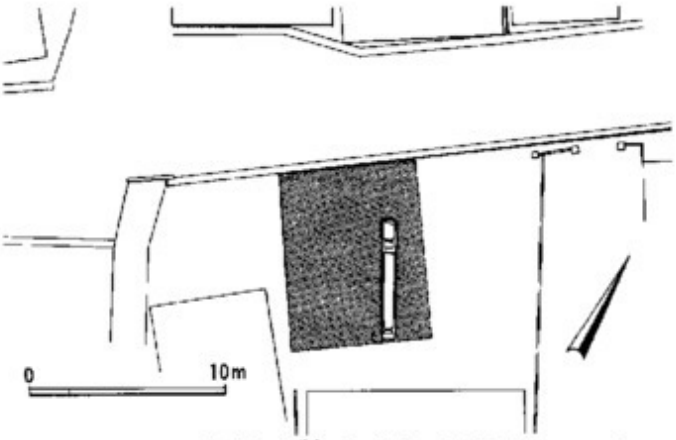
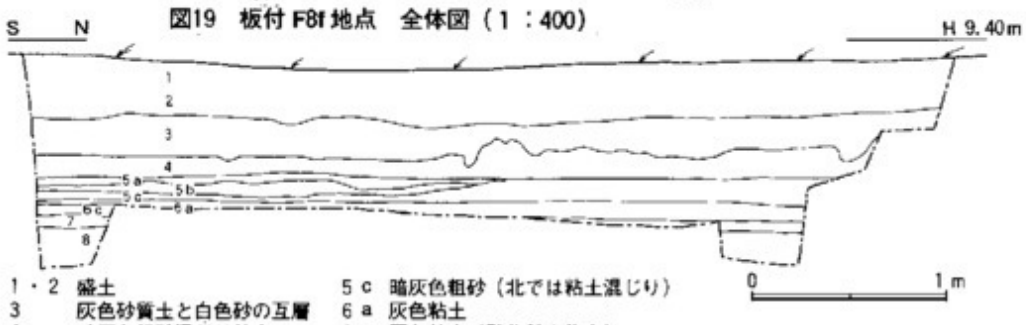



図19　板付 F8f 地点　全体図（1：400）

**F8f地点遺跡出土遺物**（図21）**弥生式土器**

ともに器台裾部小破片で、6層以下の出土である。1は内外面とも淡赤褐色を呈す底径12.0cmを測る。2の胎土は精良な粘土で、スサ状の圧痕がみられる。内外面とも淡褐色を呈す。底径6.5cmを測る。




1・2　盛土
3　灰色砂質土と白色砂の互層
4　暗灰色粗砂混じり粘土
5a　暗灰色粘土（酸化鉄斑集中）
5b　灰色粘土
5c　暗灰色粗砂（北では粘土混じり）
6a　灰色粘土
6b　灰色粘土（酸化鉄斑集中）
7　暗灰色粘土
8　灰色シルト

図20　板付 F8f地点遺跡土層断面図（1：40）

## 小結

F8b地点においては、標高8.5mで地山面となっていたのに対し、F8f地点では、より深く砂の堆積がつづいている。両地点の距離は、5m程度で、そのいずれかの位置に段落ちの肩線があるものかと考えられる。それは、砂層の堆積により埋没してしまっているが、出土遺物により、弥生時代中期後葉までの形成になるものかと考えられる。

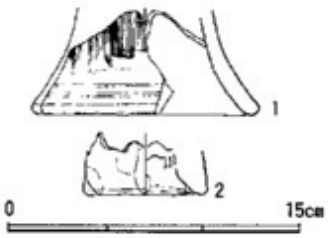



図21　板付 F8f 地点遺跡出土遺物実測図（1：4）

さて、宅地化される以前の状況を示す地形図からすると、この鞍部は埋没の状況をそのまま残す低平な地形を示しているようである。ところで、弥生時代に埋積されたと考えられる段落ち部の北岸は既往の調査では未検出であり、現状では幅50mまでの可能性がある。これが溝状を呈するものであるのか、それとも幅広い谷状を呈するものであるのかは、続く調査に期待したい。（杉山）

# Ⅳ　板付E8a地点遺跡の調査

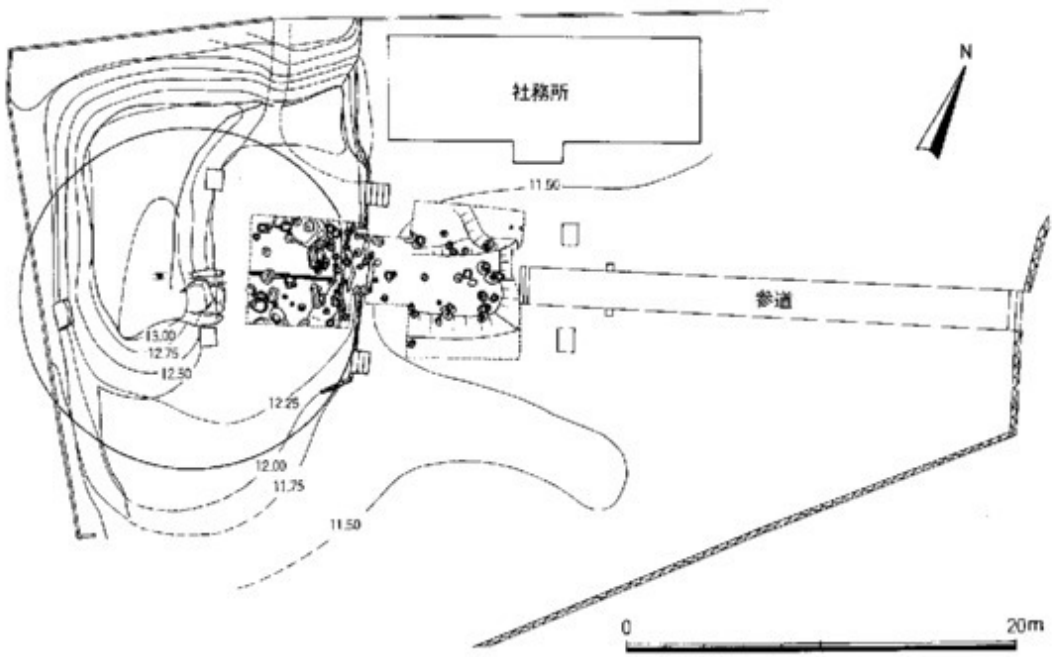



図22　板付 E8a 地点遺跡 調査区周辺実測図（１：400）

| | | |
|---|---|---|
| 遺跡調査番号：　8654 | | 遺跡略号：　ITZ |
| 調査地籍：　博多区板付５丁目７－39 | | 分布地図番号：　24－A－1 |
| 工事面積：　60㎡ | 調査対象面積：　60㎡ | 調査実施面積：　83㎡ |
| 調査期間：　1987年　月26日～1987年２月29日 | | |

表６　板付E8a地点遺跡調査要目

**板付E8a地点遺跡**　本調査区は板付南台地の南東部、標高10～12ｍ付近にある。調査は板付八幡神社の本殿、拝殿の老巧化による改築工事に伴い実施した。当社境内の本殿西側には「板付八幡古墳」と呼ばれる横穴式石室の一部が露出し、また近接して1974年に調査されたE．D9地点で弥生時代の組合式木棺が検出されており、本調査区周辺にこれらの関連遺構の存在が予測された。なお、発掘調査中に石室北側８ｍ付近で須恵器甕の肩部破片を表面採集した。内面青海波、外面格子叩きであり、６世紀後半～７世紀前半に位置ずけられるものである。以下では調査区を便宜上拝殿部分（東側）と本殿部分（西側）に分けて

説明する。

**拝殿部の調査**　まず拝殿部分は本殿側と0.7～0.8ｍの段差があり、すでに相当の削平を受けていることがわかる。残存していた拝殿の礎石（３×３間）と造成土を除去すると鳥栖ローム中～下部の地山面が現われる。地山面は現在の参道と平行した長方形の基壇状をなしており、この基壇にほぼ合致する規模の掘立柱建物SB1，2と柱穴多数を確認した。SB1は未掘部分もあり全体は不明であるものの、東西３間が桁行540cmで南北３間が梁行360cmを測る。柱穴の下部は柱の腐敗後の空洞が認められ、小量の瓦片と糸切り底を有する土師皿が出土した。SB2はSB1の北側桁行の柱穴を共有する東西３間が桁行550cm、南北３間が梁行320cmを測る変則の総柱建物である。柱穴の一つ（Ｐ１）からは糸切り底を有する土師皿と焼土、炭化物が多量に出土した。何らかの祭祀に関わる遺物と考えられる。SB2は切り合いからSB1に先行する建物である。その他の柱穴にも土師皿を含むものが多く建物と同様の時期と推定される。これらの遺構は近世の所産であり建物の主軸線が八幡宮参道の主軸と一致することから本社の古い社殿の可能性が高い。

**本殿部の調査**　次に本殿部分は現存していた建物の基壇と礎石の除去から始めた。この基壇の中には、やや規模の小さな礎石を持つ基壇が埋め込まれていた。ちなみに現存していた本殿は東西２間、南北３間の庇付きで桁行320cm、梁行240cmを測り、埋没していた基壇は同様の構造でありながら桁行300cm、梁行240cmを測る。後者の基壇中からは糸切り底の土師皿などが出土した。基壇と20cm程度の造成土を除去すると鳥栖ローム上部の地山面が現れ、この部分も相当の削平を受けていることが判明した。地山面で多数の遺構を検出した。掘立柱建物SB3は未掘部分もあるが、４×４間であり桁行490cm、梁行480cmを測る。柱穴内には石や瓦片が根じめとして設置されている。SB3の主軸はSB2と一致している。竪穴式住居SC5は壁溝と床面の一部を確認したのみである。壁は高さ約10cmを残している。床面80×50cmの範囲に焼土が形成され、周辺に土師器高坏、甕や砥石が出土した。古墳時代中期（５世

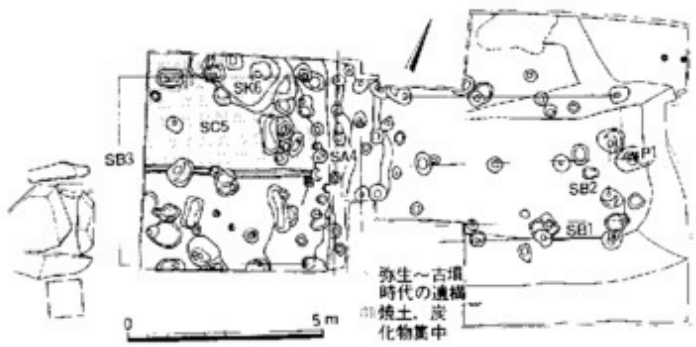



図23　板付E8a地点遺構調査区全体図（１：200）

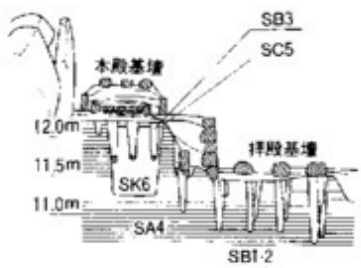



図24　板付E8a地点遺跡遺構断面模式図

紀前半）頃の時期が推定される。土壙SK6はSC5の床面清掃中に検出した遺構であり、約160×200cmの隅丸方形の平面形を呈し深さ80～90cmを測る。出土遺物は少ないが弥生時代中期の時期が比定される。以上の他に多数の柱穴を検出したが遺構としてまとまるものはなかった。なお、拝殿部と本殿部の間にある石垣も撤去して精査したが、削平が進んでおり杭列SA4とそれを覆う石列が検出されたのみである。何れも近世のものである。

**小結**

以上の調査成果を時期別にまとめると次のようになる。

1、弥生時代中期の土壙

2、古墳時代中期の竪穴式住居

3、古墳時代後期の古墳の築造

4、近世の神社に関係する遺構群

第Ⅰ期　SB2（拝殿）、SB3（本殿）、SA4（杭列）

第Ⅱ期　SB1（拝殿）、下部基壇（本殿）

第Ⅲ期　現存した建物群

なお、古墳については今回の調査ではほとんど資料を得られなかったが、略測による石室の内法は奥壁側で幅2.1ｍ、長さ３ｍ以上とやや大きい規模を示す。墳丘は周辺地形の測量の結果著しく改変されてはいるものの一部に墳丘斜面を反映している部分があり、図上で径18～20ｍ程度の墳丘規模が復元される（図22）。

最後に板付八幡宮についてすこし触れよう。現存していた本殿、拝殿は解体した建築材中に天明元（1781）年建立の墨書記載がある。寛政７（1795）年に編集された「筑前國続風土記」巻17、那珂郡板附村の項によると、神殿方一間半、拝殿二間三間、石鳥居一基とあり、現存していた規模（第Ⅲ期）にほぼ一致する。神殿の方一間半は前面の庇部分も含めた数値であり、石鳥居は参道中にある享保５（1720）年銘のものであろう。第Ⅰ、Ⅱ期の神社関係の遺構の時期はきめ手に欠けるが、柱穴内から出土した土器片から何れも近世（16世紀）より遡り得ない。本神社に関する最も古い記年銘を示す資料には現在社務所に保管されている瓦質の灯籠があり、これには、

九州筑前國、那珂郡内板附村、八幡宮、芳長15年卯月　大工　甘木九良右衛門　寄進也

とある

慶長15（1610）年には本社が存在していたと思われる。先述した「筑前國続風土記」には「鎮座の始詳ならず。此社いにしえは枝郷八幡原（現在の国鉄南福岡駅前周辺…筆者注）にありしを、近世今の所に遷し祭れりとそ。」と記されている。以上の断片的な資料から想定するならば第Ⅰ期は16世紀後半～17世紀後半、第Ⅱ期は17世紀後半～18世紀後半のそれぞれの間に存在していたと考えられる。その後、第Ⅲ期とした調査前に解体された社殿が1781年～1987年の約200年間鎮座していたと考えられる。さらに詳細な時期の比定は今後の整理に待ちたい。

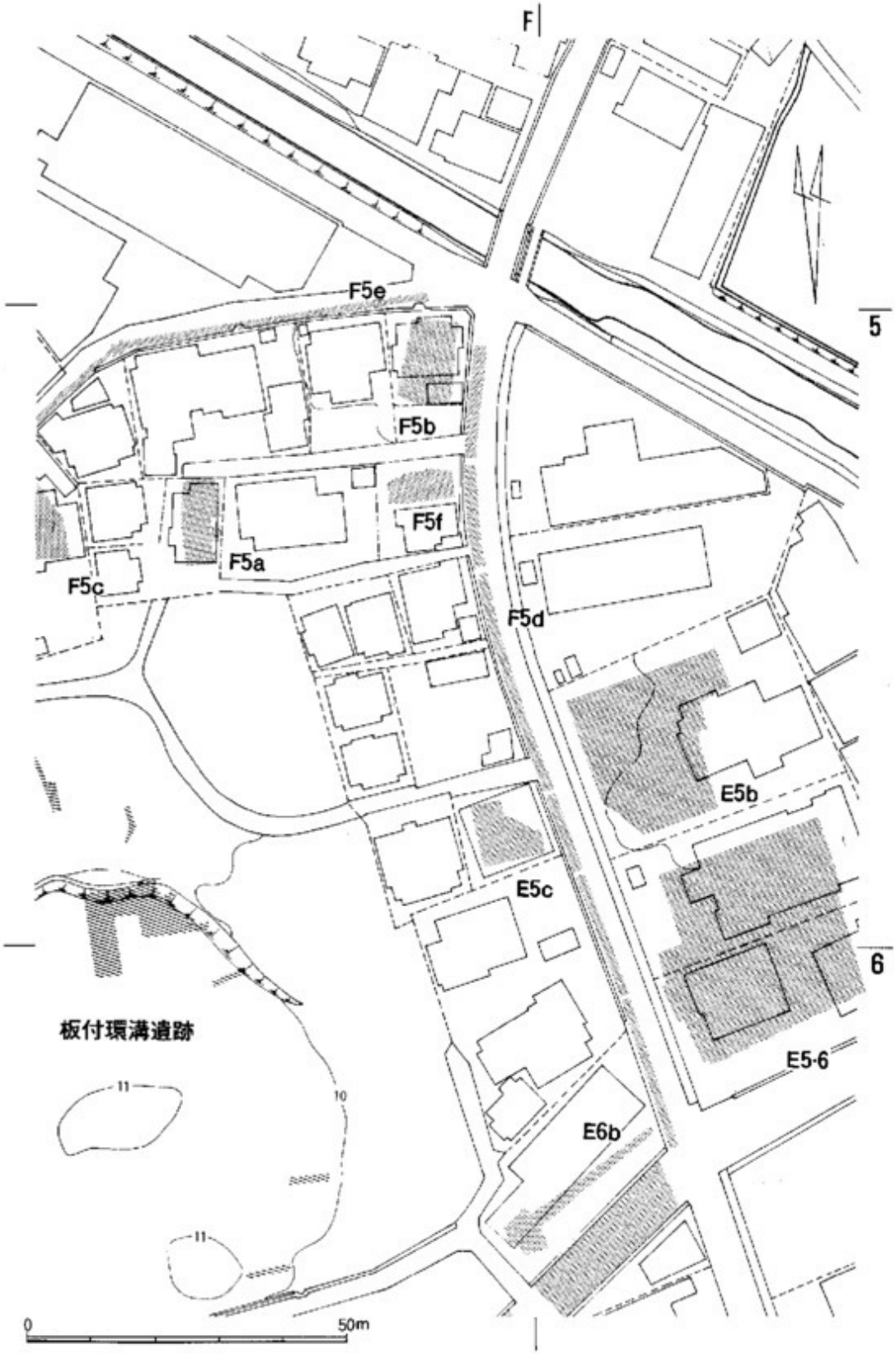



図25　板付F5区及び周辺の調査地点位置図（１：1000）

# V　板付F5f地点遺跡の調査

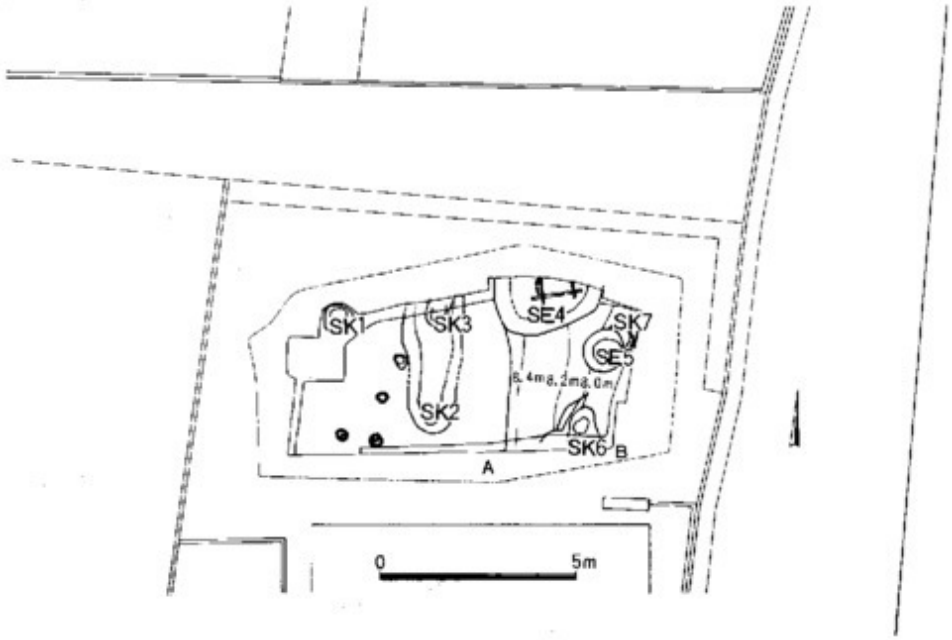


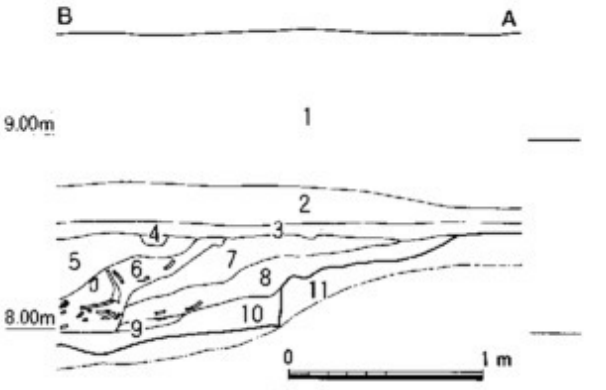

図26　板付F5f地点遺跡調査区全体図（1：200）

| | | |
|---|---|---|
| 遺跡調査番号：　8614 | 遺跡略号：　ITZ | |
| 調査地籍：　博多区板付2丁目12−28·31　分布地図番号：　24−A−1 | | |
| 工事面積：　98㎡ | 調査対象面積：　98㎡ | 調査実施面積：　56㎡ |
| 調査期間：　昭和61年6月24日～昭和61年7月24日 | | |

表7　板付F5f地点遺跡調査要目

## 板付F5f地点遺跡

本調査区は板付北台地の東端に位置し、台地から沖積地に変るところである。環濠の北方約100mの位置にあたる。1977年に発掘調査されたF5f地点の南側、小道を隔てて約10m離れている。調査区の東側一帯は近年まで約1m低い水田であったが、現在は埋めたてられて宅地や工場の敷地となり平板な地形となっている。




1．造成土　2．明茶褐色土（近代水田土壌）
3．暗茶褐色土（近代水田床土）4．暗褐色土　5．黒褐色土
6．黒褐色土（土器片多量包含）7．暗褐色土　8．暗黒褐色土
9．暗褐色土　10．黒褐色土　11．黄色～黄褐色土（鳥栖ローム中～下部）

図26　板付F5f地点遺跡土層断面図（南壁）1：40

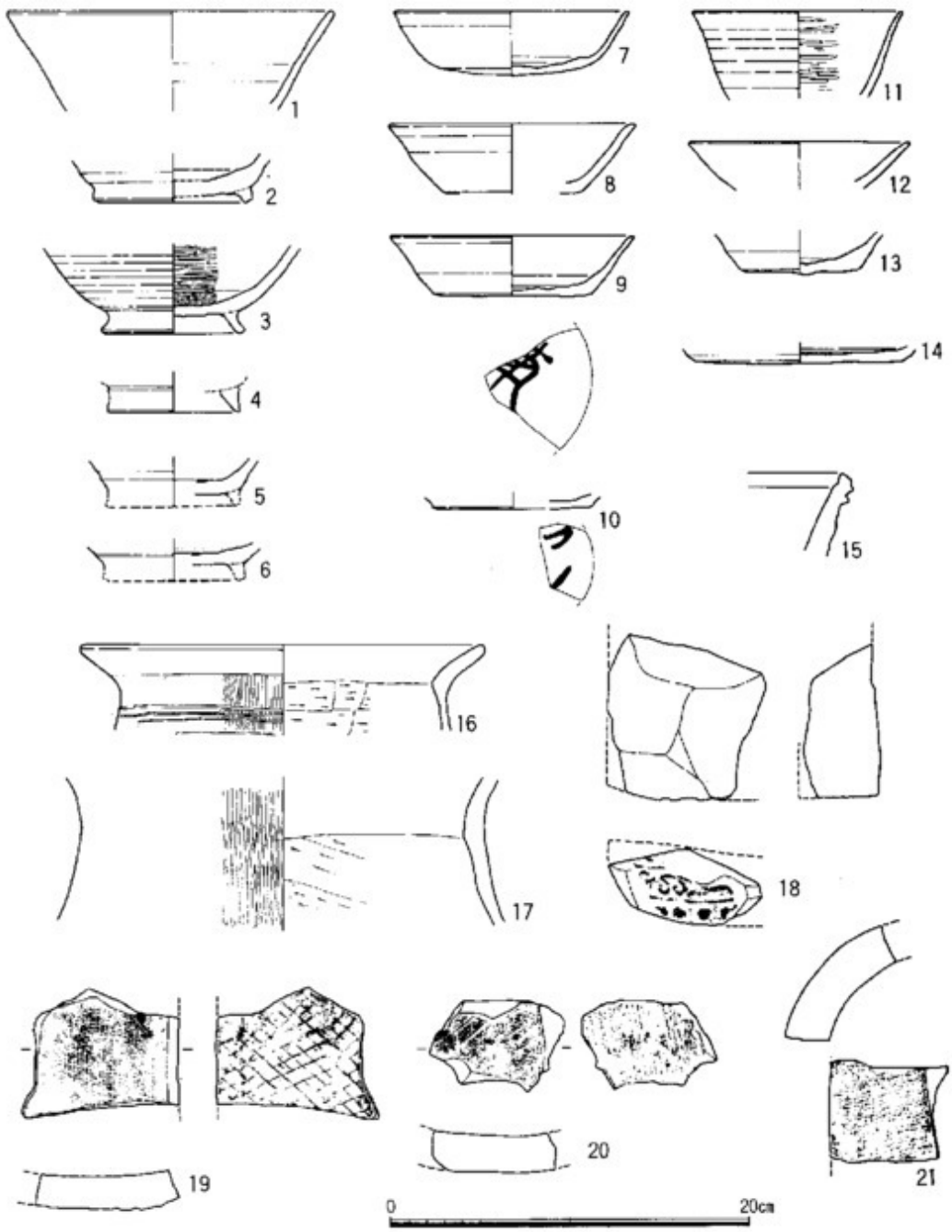



図28　板付 F5f 地点遺跡　SE 4 出土遺物（１：４）

## 板付F5f地点遺跡の遺構と遺物

発掘調査の結果次のような層位が判明した（図27）。第１層は造成土　第２～３層は旧水田土壌、第５～

6層は黒色～暗褐色の遺物包含層（いわゆる「整地層」）、第11層は基盤層である鳥栖ローム下部～八女粘土である。調査区内の西側は水田土壌を除去するとすぐに八女粘土が現れるほど削平が進んでいる。検出した遺構としては井戸1、土壙6、柱穴4がある（図26）。土壙のうちSK5, 7は井戸の可能性がある。SK6とSK7は「整地層」の下面で検出し、何れも弥生時代の土器片のみが出土している。SK5は「整地層」の上面で検出し、中世（13世紀前後）の遺物が小量出土している。SK1～3と柱穴は鳥栖ローム下部～八女粘土の上面で検出した。何れも時期を確定する遺物が乏しいが弥生時代に所属する可能性が高い。

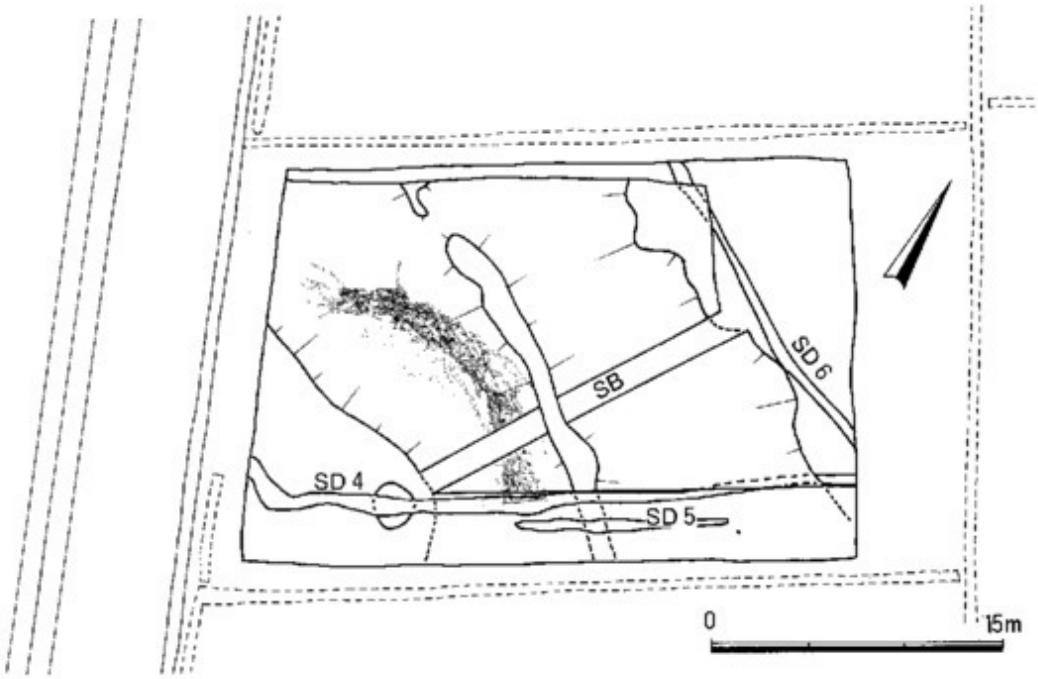
井戸SE4は「整地層」上面で検出した、一辺約2.8mの隅丸方形で深さ2.4mの二段掘りの堀方を持ち、蒸籠状に板材を組み合わせた井側をもつものである。井側の内外から出土した遺物から古代（9世紀代）に埋没したと考えられる。SE4のおもな遺物としては須恵器椀（1．2）、土師器椀（4～6）、坏（7～14）、黒色土器A類椀（3）、緑釉陶器、須恵器甕（15）、土師器甕（16．17）、瓦（18～21）などの破片がある。坏には墨書の認められるもの（9．10）があり、緑釉陶器は胎土、色調、釉の状態で二種に分類される。瓦の破片は8点出土した。軒平瓦は小片であるが、珠文の特徴から太宰府蔵司前面域出土瓦[注10]や高畑廃寺SK9出土瓦[注11]と同范の可能性が強い。

**小結**　「整地層」からは小面積の調査にも関わらず多量の遺物が出土した。これは弥生時代中期を主体に同前、後期、古墳時代前期のものを含んでいる。山崎純男氏は隣接するF-5b地点の調査でこの「整地層」の形成を中世以前の開田に伴うものと推定されているが、井戸SE4の検出からこの層の形成が少なくとも古代以前に遡ることが明らかとなり、またこの井戸の存在から付近が該期には耕地ではなく、集落等の生活域であったと考えられる。しかし、遺構の規模や各種の出土遺物から一般の集落の一部とするには疑問が残る。

（吉留）

図29　板付 F5f 地点遺跡　SE 4　　（西から）

# Ⅵ　高畑第12次地点遺跡の調査




| | | |
|---|---|---|
| 遺跡調査番号：　8649 | | 遺跡略号：　TKB |
| 調査地籍：　博多区板付6丁目2−9·10 | | 分布地図番号：　24−A−9 |
| 工事面積：　910㎡ | 調査対象面積：　910㎡ | 調査実施面積：　520㎡ |
| 調査期間：　1986年11月17日～1987年2月8日 | | |

表8　高畑第12次地点遺跡調査要目

**調査の概要**　本調査区は、警察学校がある麦野丘陵の北東部に隣接する標高9.5ｍの沖積地に位置している。まず試掘調査を行った結果、古墳時の大溝が確認されたので、宅地造成に先立って発掘調査を行った。

調査対象地は、2筆910㎡あるが、南・北側は水田であり、東側は沖積地で遺構が試掘で検出されていないため、試掘検出の大溝の調査に重点を置く形で調査区を設定した。

遺構は、現代水田耕土・床土を除去し、黒灰色粘質土を剝いだ標高9.2ｍの面で確認した。検出した遺構としては、近世の小溝2条（SD4・5）、中世以後の小溝1条（SD6）、古墳時代の土壙1基（SK7）、大溝2条（SD1・2）、弥生時代の大溝1条（SD3）がある。

**古墳時代の遺構**

SK6は、径1.2mの浅い皿状円形土壙で、須恵器の甕、坏などが出土した。性格は分からないが、出土須恵器から6世紀代のものである。

SD1は、SD2と平行し、南東から北西に流路を取る幅約8m、深さ1.2mの大溝である。本大溝の位置・流路から10次調査区のSD26、4次・7次調査区SD01につながる大溝と考えられる。本大溝は、灰色から灰褐色のややしまった砂層を浸食して形成されたと考えられる。遺物は、30cm前後の茶灰色粗砂層を挟んで、遺構検出面から最も深い所で40cmの厚さをもつ暗灰色から黒色粘土層、川底に30cmの厚さをもって堆積している砂混じり黒灰色粘土層から主に出土した。上層中の出土遺物は、大溝中央部の幅3m内に集中し、木器・流木の上に座る形で土器が出土した。またこの遺物群を止めたと考えられる杭群を検出した。土器は、5世紀前半代の土師器で甕・鉢・高坏・坩・ミニュチュア土器で完形に近い形で70個体ほど出土した。木器は、鍬類及び鍬類の柄、鉄斧・鉄鎌などの柄・槌・編み錘・弓・模造船・鼠返しなどの建築材など約180点出土した。4次・7次・10次調査区と比較すると農具は少なく、編み錘・柄類が多いのが、本調査区でのありかたといえる。

下層からは、5世紀初頭の土師器の甕・壺・鉢・高坏など完形になる土器が10点前後パンケース2箱分の土器に混じって出土した。SD2もSD1と同規模で、砂層を浸食して形成された大溝であるが、上のほうに30cmほど、SD1上層と同じ土が堆積しているが下はシルト・粘土・粗砂層の互層となっている。出土遺物としては、SD1上層と同時期の土師器がパンケース2箱ほどと、鍬など数点の木器が出土した。

**弥生時代の遺構**

幅約14m前後、深さ2m前後の大溝（SD3）は調査区中央部ではSD1の西肩SD2の東肩を共有し、八女粘土層を底とする断面逆台形で、南から北へ流路をとるが、SD1・2よりもより磁北側にふっている。SD3の西岸には建築廃材・大木を横木として丸杭で止め、粘土で固めた護岸施設があり、この護岸施設に連なってアーチ状の堰が調査区北側境界に向かって延びているが、対象地外のため全容は明らかにできなかった。出土遺物としては、後期後半から終末期にかけての甕・壺などの完形品10数個体を含む、パンケース5箱分の土器、護岸施設・堰に用いられた建築材・一木造り長柄鋤・三叉鍬など20数点が出土した。

**小結**

本調査区の調査では、4次[注12]・7次[注13]調査区検出SD1、10次調査区のSD26[注14]の間をつなぐとともに、弥生時代後期後半から終末期にかけての護岸、堰付設遺構を持つ大溝を検出した高畑遺跡周辺での消滅している生産遺跡を考える上で貴重な材料を提供したといえる。

なお本調査区は終了したばかりであり、やっと水洗作業を始めたところである。来年度報告予定である。

（山口）

# まとめ

昭和60・61年度の発掘調査の成果の概要を記す。

**板付遺跡**　東辺部　　台地末端部から沖積地にかけて広がる「整地層」はその上位の遺構から形成年代を古代以前と考えられる（F5f地点）。南台地東辺部に位置するE7a地点では古墳時代中期の住居址が遺存し、周辺地点での成果と併せ考えて、台地東縁部の遺構の遺存状況が比較的良好であることが考えられる。弥生時代だけでなく、古墳時代の集落も痕跡を残している。

**板付遺跡**　西辺部　　F8e地点の調査により、中央台地・南台地間の括部における最古期の水田の広がりを確認した。また、F8f地点の調査も併せ考えて中央・南台地間に水路あるいは河川流路の存在が考えられる。

**高畑遺跡**　　第12次地点で、台地東北縁部の調査を行った。第４次地点、第７次地点、第10次地点で調査された溝を検出調査した。土器・木器ともに多量に出土したが、その種類と量の構成に違いがあるようである。

**諸岡B遺跡**　　第18次調査地点では、諸岡館址外周部に相当する地点の調査を行った。推定館址外にも一群の分布を認めた地下式壙は諸岡B遺跡内で４群20基、板付遺跡内では群別は明確ではないが５基を数えることとなった。それらは規則的に配列するか、構造の一部を共有するか部分で連結するかして、同時存在であるかまたは近接した時間内の所産であることを考えることが出来る。また、他での多くの例と同様、埋土中からの遺物の出土はあっても、使用の状態を示す遺物あるいは他の痕跡に欠けている。　　（杉山）

注）
注）１　福岡市教育委員会　1986　板付周辺遺跡調査報告書(11)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集
注）２　山崎純男　1980　「福岡市板付遺跡の成立と展開」歴史公論第74号
注）３　昭和61年度報告予定
注）４　福岡市教育委員会　1982　板付周辺遺跡調査報告書(８)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集
　　福岡市教育委員会　1982　諸岡遺跡　－　第14・17次調査報告――　福岡市埋蔵文化財調査報告書第102集
注）５　地下式壙については「地平面下に竪坑を掘り下げてこれを入口部とし、その底面から横へ掘り拡げて本体である地下室を築いた遺構」という規定がなされている（中田英　1977　「地下式壙の研究について」神奈川考古　第２号）
注）６　福岡市教育委員会　1979　板付周辺遺跡調査報告書(５)　福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集
注）７　注）６に同じ
注）８　福岡市教育委員会　1975　板付周辺遺跡調査報告書(２)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集
注）９　注）６に同じ
注）10　九州歴史資料館　1982　太宰府史跡　昭和56年度発掘調査概報
注）11　福岡市教育委員会　1983　板付周辺遺跡調査報告書(９)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集
注）12　福岡市教育委員会　1980　板付周辺遺跡調査報告書(６)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集
注）13　注）４に同じ
注）14　福岡市教育委員会　1985　板付周辺遺跡調査報告書(10)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第115集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第154集
板付周辺遺跡調査報告書(12)
1987年3月31日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10の29
印刷　博巧印刷株式会社